

月例研究会（2009年12月16日）

全農全会派指導者の戦中・戦後
——「左派」農民運動指導者の
動静

横関 至

本報告では、全農全国会議派（以下、「全会派」と略記）の指導者を対象として、戦前の「左派」農民運動の指導者と戦後農民運動および戦後政党との関わりを検証した。この作業は、「左派」における戦前と戦後の「継承と断絶」の問題を探る試みの一環をなすものである。

「左派」農民運動とは、次の2つのものを指している。1つは全農総本部に存在した黒田寿男、大西俊夫ら労農派によるものである（拙稿「労農派と戦前・戦後農民運動（上、下）」『大原社会問題研究所雑誌』440号、442号、1995年参照）。もう1つは、全会派に結集した勢力によるものである。全会派は全農内部の「革命的反対派」として位置づけられた組織であり、共産党の強い影響下にあった。

まず、1章では全農全会派における「表」の指導部と「裏」の指導部が存在し、「裏」に対する批判が新しい本部の確立要求の運動となって具体化したことを指摘した。2章では、「裏」の指導部を構成していた共産党農民部と全会派フランクの陣容を検討し、農民運動の経験のない人

物が中心であったことを示した。3章では、総本部復帰運動と労農派との関わりを分析した。4章では、総本部復帰運動と同時期に、全会派フランクが中心となって共産党多数派の運動を展開したことを紹介した。5章は、旧全会派指導者の戦時下の動静を対象として検討した。そこでは、戦争遂行への積極的協力の道を歩んだ者もあれば、共産党再建への関与をした者、雑誌編集などの仕事に従事した者など、戦時下の様々な歩みを跡付けた。6章では敗戦直後の時期に旧全会派指導者がどのような行動をとったかを検出した。終章では、戦前の「左派」農民運動と戦後政党との関わりについてまとめた。そこでは、社会党と共産党の差異が際立った。日本農民組合再建・社会党結成の中核となった労農派や旧全会派の人々が社会党に集結した。これによって、社会党は戦前の「左派」農民運動との継続の要素が大きい政党となった。それに対し、旧全会派の運動体験を有した人物は共産党の中央指導部には登用されなかった。多数派に関与していたことが、その原因であった。戦後共産党は旧全会派が掲げていた農民委員会方針を提示したが、それは農民組合否定論と結びついたものであり、農民組合内部の反対派としての旧全会派の精神を継承したものではなかった。その意味において、共産党と戦前「左派」農民運動との間には大きな断絶があった。

（よこぜき・いたる 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員）